漱石全集　第２２巻　書簡集　上

一高、東大、松山、熊本、ロンドン、東大講師までの書簡を扱う。要するに、朝日入社前までの時機にあたる。

学生時代、松山、熊本と、10 年以上にわたって、宛先の筆頭は子規だった。学生時代は諧謔調の私信、松山・熊本時代は句稿が中心となる。熊本時代は、これに就職の斡旋や教員の照会など、人事雑務に汲々とする。また、後の書簡（例えば 71 や 689 など）からは、漱石は砂をかけて松山を後にしたようにも読めるが、赴任の最中は、「教員生徒間の折合もよろしく好都合に御座候東都の一瓢生を捉へて大先生の如く取扱ふ事返す返す恐縮の至に御座候」と（59)、満更でもなかった様子である。

洋行中は、まず寂しい、そして嫌だ、最後には帰りたい、と文字通り神経衰弱だった。実はこの二年と数ヶ月の間、たったの 57 通しか手紙を認めていない（残されていない)。うち、鏡宛が最も多く、22 通を占める。子規宛は五通のみであるが、これでも、虚子宛の六通に次いで多い。子規から漱石宛の最後の書簡は、明治 34 年 11 月 6 日で、「僕はモーダメニナツテシマツタ毎日訳モナク号泣シテ居ルヤウナ次第ダ」で始まる。これに対して漱石は、落手ほどなくして 12 月 18 日に返信している。But、これが最後の子規宛書簡となった。子規は、明治 35 年 9 月 19 日に亡くなるが、この間、約十ヶ月、一切の音沙汰は無かったのだろうか。勝ち組と負け組の明暗を見るようで、いささかゾッとする。

東大講師時代は、教え子や友人たちとの下らない内容の手紙が多い。それだけ生活が安定していたのだろう。電話ではなく手紙が主な通信手段だったということは、交友関係は基本的に徒歩圏内で、だからこそこれは木曜会の漱石山房に直結して行くことになる。松山・熊本時代の運座が延長したと考えれば良い。

実は、『猫』投稿前後の書簡を読んでも、漱石の創作熱は、全く伝わってこない。But、連載が始まってからの傾倒ぶりは、本当に熱く伝わってくる。新聞・雑誌からの寄稿依頼が多くなり、頻りに大学を辞めたいとこぼすようになる。まさに一夜にして売れっ子作家が誕生して行く過程がよく分かる。この頃から、候文ではなく言文一致体の文章になる。

漱石全集　第２３巻　書簡集　中

明治 40 年の朝日入社後、明治 44 年の前記三部作までの書簡が収められている。

「隠居の様な教授生活」を捨てて創作を糊口に選んだからには、嫌でも書かなければなら

ない（913, 1299）。脱稿が遅れてもゴメンで済んだ『ホトトギス』とは、違う。しかも、洋行帰りの東大講師が朝日新聞に引き抜かれて、連載小説が飛ぶ様に売れる。当然、周りからのあたりも強かった（1022, 1170）。

そこへもって、文芸欄の創設と運営（1020, 1293）、出張講演（1545）、辞表提出と撤回（1571, 1576）、学位授与辞退（1429）、千駄木から西片を経て早稲田に三遷、演説や談話の依頼（1166）、などなど。「昔正岡抔と往来する時分には随分ひまに任せて長い手紙のやりとりをした。今では忙しくてとても出来ない」、というのは、分かる（1147）。「癇癪が起ると妻君と下女の頭を正宗の名刀でスパリと斬つてやり度」もなるだろう（853）。

そして、「小生も本年は四十二の厄年故どうなるか知れず」、と（1015）。夏になると胃潰瘍（1219, 1335, 1545）、糖尿病（1016）、「手のシビレ」（1347）、痔（1545）。病膏肓だった。実はあと五年で逝去するのだから、やむを得ない。

But、お陰様でこの時期、洋行中のような神経衰弱からは、比較的、縁が遠くなっていた。のんびり悩んでいる場合じゃなかったのであろう。四十而不惑とはよく言ったものである。

以下、単独で読んでも楽しめる書簡を列挙する。

791, 794, 796, 797, 817：朝日入社の経緯
1216：家賃滞納のススメ
1246：洋行中の寅彦宛に近況報告
1257：東洋城にダメだし
1259：宗教の勧誘を断る
1293：文芸欄の運営について苦言
1300：見知らぬ人から粕漬けを貰った御礼
1367, 1421：鏡子に説教・不信
1576：慰留されて辞表撤回